

# 子規會誌

一二九号

平成二十三年  
四月

子規の見た日光 ..... 今井道子 ..... 一

漱石の観瀑案内人の訂正など ..... 戒能申脩 ..... 二二

平成二十一年度正岡子規ほか研究資料・文献目録 ..... 松山市立子規記念博物館 ..... 二八

# 例会 記 録

## ○平成二三年一月例会(第八一六回)

一月一九日(水) 石手公民館 出席者 三三名  
新年懇親会

## 会長年頭挨拶「平成二三年の松山子規会」

会長 井手 康夫氏

目下鋭意編集中の『松山発子規事典』については、次々と新しい発見もあり、その完成が期待される。会員の皆さんの努力によって、今年も松山子規会がいつそう発展することを祈る。

## 正岡子規漢詩・和歌の朗詠 吟道明教館

武田 峰松氏  
杉本 松雲氏

## 夢想神伝流居合演武

この後宴会に移り、カラオケを楽しみ、最後に和田茂樹前会長が復元された催馬楽「伊子の湯」を歌って閉会した。

## ○平成二三年二月例会(第八一七回)

二月一九日(土) 正宗寺本堂 出席者 三六名  
講演「子規の悟り―平気で生きる―」

常任理事 忽那 哲氏

『病牀六尺』第二十一の「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。」という境地に至る過程とその真意についての講演。『筆まかせ』『無花果艸紙』の「悟り」についての記述や「悟り」を内包した短歌に基づいて、「子規は、自分の仕事は人の生を鼓舞するためにあるという信念をもち、仕事に没頭することによって、邪念を退け、煩惱を払い、充実感を得る。これが子規のいう『平気で生きること』の悟りである。」と熱弁を振るわれた。

## ○平成二三年三月例会(第八一八回)

三月一九日(土) 正宗寺本堂 出席者 七一名  
講演「歌人山上次郎一周忌」

『百姓と文学者』二つの道に生き」

会員 烏谷 照雄氏

三月一三日一周忌を迎えられた山上次郎氏の、九七年の生涯を、ご両親、妻で歌人の松根さん、子息茂次郎氏らの肉親との農業を通しての深い愛情、三度の出征と反戦思想家で伯父の安藤正楽氏との交流、歌人斎藤茂吉門下の歌人としての活動、戦後県会議員としての政治活動など、多岐にわたって詳しく述べられた。子規や茂吉の顕彰、日中友好などの功績にも触れられた。一〇〇首を越える短歌、九編の文章や言葉を用いた、実感と説得力に富む講演であった。土居短歌会をはじめ、東市から多数の方々が参加された。

# 例会 案 内 (予定)

○五月例会 平成二三年五月一九日(木) 正宗寺本堂  
講演「子規の俳句管見―子規事典資料として―」

副会長 乾 英司氏

○六月例会 平成二三年六月一九日(日) 正宗寺本堂  
講演「子規と芝居」

愛媛大学准教授 神楽岡幼子氏

○七月例会 平成二三年七月一九日(火) 正宗寺本堂  
講演「松山今昔」

会員 戒能 申脩氏

## 子規の見た日光

子規は明治十九年七月、旧藩主久松家の子息定靖公またすに随伴  
壯観筆紙に尽し難し、他日写真を送るべし以って一斑を知り  
写真は買い求めたものと思われるが、写真の裏面には直筆  
は子規記念博物館のご許可によりその全てを掲載できること



日光山麓 1897年

### 会報 会費納入についてお願い

会誌（第一二八号）の送付で二十二年度の会誌の発  
送は終了いたしました。

つきましては、年会費の納入ご協力についてお願い  
申し上げます。松山子規会は皆様の会費で運営いたし  
ております。会の運営の円滑を期するためにも改めて  
ご協力をお願いする次第であります。

すでにご入金下さっている方も沢山いらっしゃいま  
すが、一二八号で会費切れとなる方には本誌に振替用  
紙を同封させていただきました。

平成二十三年度会費（二十三年四月～二十四年三月）

年会費 三、〇〇〇円

尚お問い合わせなどについては事務局宇和宜までご連  
絡下さい。（〇八九一九七六一六八二三）

松山子規会

# 子規の見た日光

今井道子

子規は明治十九年七月、旧藩主久松家の子息定靖公まだきに随伴し、日光漫遊に出かけた。その感動を叔父大原恒徳に「美麗壯觀筆紙に尽し難し、他日写真を送るべし以って一斑を知り玉へ」と書簡に記した日光名所の写真である。写真は買い求めたものと思われるが、写真の裏面には直筆による解説を記している。写真は全部で六葉あるが、この度は子規記念博物館のご許可によりその全てを掲載できることを感謝申し上げます。



日光山華嚴瀑 16.3×11.0cm

## 日光山華嚴瀑

此瀑中禪寺湖ヨリ流ル者ニシテ其長  
七十五丈アリテ大谷川ノ水源ナリ(此圖  
見エル甚高ノ半分ナリ)其雄壯實  
東第一ト云フベシ滝壺岩燕トテ一種ノ  
異鳥アリ其形燕ニ似テ尾割ケテ稍大ナリ



日光山霧降の滝 16.3×11.0cm

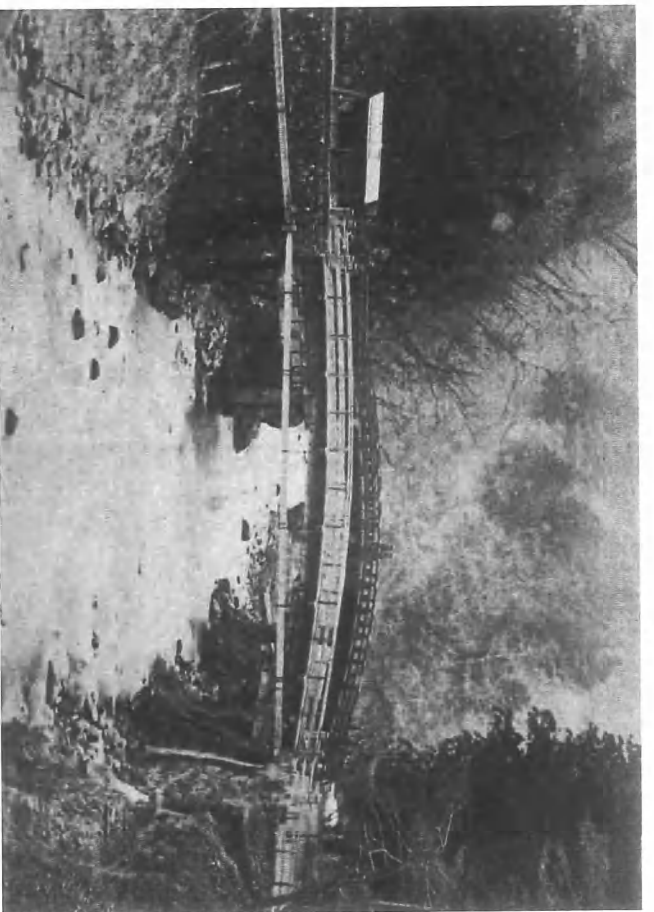


飛ビ込ミ恐悦ノ獅子 9.8×5.8cm

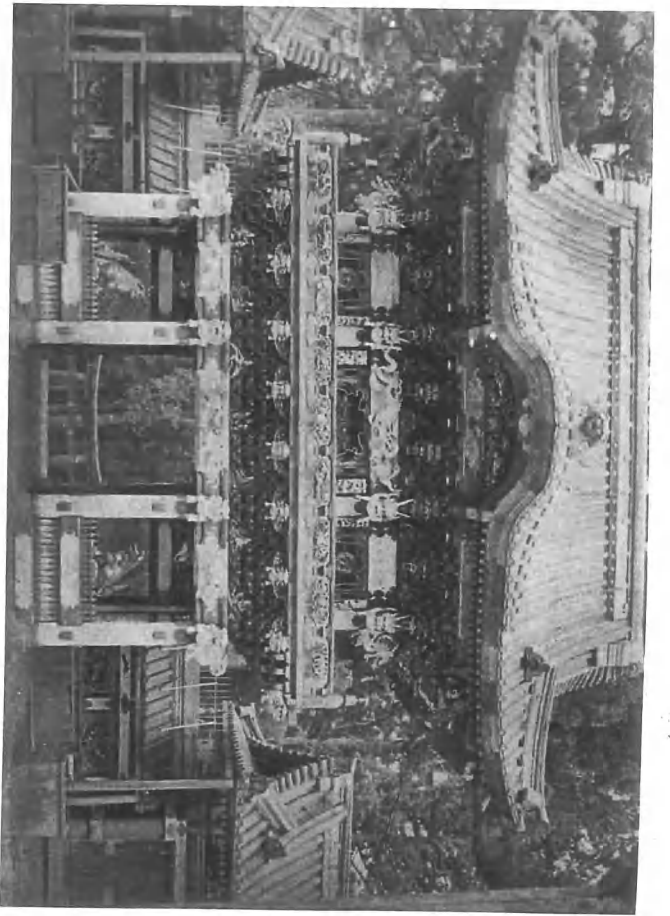


是ハ飛ビ込ミ恐悦ノ獅子ト申シマス 後ノ  
 石垣ト一ツ石テゴイマス 三代將軍序成リノ由  
 お目トマリマシタハ此獅子許リジヤト申シ  
 マス 此獅子ハ一日見テモ見足ラヌト仰セ  
 ラレマシテ佛善請奉行秋元但馬守様ニ  
 佛太刀ヲ賜下サレタト申ス丁テゴイマス  
 へい  
 (東照宮ナリ)

(注・案内人の口調をまねたものか)



日光山神橋 5.8X9.8cm



東照宮陽明門 11.0X16.3cm

日光山神橋前見長廿四河橋三河四尺  
 從朱蓬三欄干擬  
 至珠了常人、係  
 許廿又此川華嚴  
 滝下流大谷川云  
 往古勝道上人登山  
 以此處兩岸絕壁  
 如何尺十難才大蛇  
 橋于十之之可渡也故  
 神橋名于又山菅  
 蛇橋尺云水橋有于水橋于

東照宮陽明門裏面

俗比嘉門上之欄南西而于四河二河  
 半三先送、四方屠破風銅皆三重蓮  
 木下三金籠上白語于纏出之其河每素  
 木彫、獅子數頭于、柳皆牡丹產草、  
 彫物柱十本地紋後裝、內三四窓、置  
其內為櫻草花、彫、高欄、河、池  
子遊之、其彫于、對通三尺每金籠、彫  
 一本置于別木上通、人物鳥獸等、彫物  
 或、禁具書画人物、周公孔子顔回處  
 教費張房琴今高統宮康阮藉曲畫子、  
王子獻其他處、三尖、四五九摺等何也  
 極彩色三、名主生中如、方、金籠  
 目下六光、輝々、左右、流身下  
 極彩色之、河、金籠、左右、流身下  
 王子獻其他處、三尖、四五九摺等何也  
 日之見此視尺又幾、日暮門、俗、三、折、天

明確にし、日本新聞社員として生きると一大転換を決意した時期である。更に松山より、母妹を呼び寄せ根岸に家族を成すことを決めた。新しい門出を祝して、陸羯南・鳴雪・漱石・仲間たちと食事を共にし、励ましを受けていた。

六年前に初めて訪れ、絶景に感動した日光に季節を変えて訪れ、自らの門出を鼓舞するエネルギーを持ちたいと思いい、訪れたのではないだろうかとも思われる。

「日光の紅葉」は内藤鳴雪との二人旅

詩は祖父に俳句は孫に春の風

鳴雪

(この句については子規から、春の風では何の事か少しも分らぬと笑われたことがあると鳴雪が書き残している。) :二十五の春のころのこと僕も段々俳句の趣味が分りかけたのですこぶる熱心になってきた。居士と日光行きや武州高尾行きをして、居士に紀行の出来たのはこの年の末である。

〔追懐雑記〕から鳴雪の回想

得能文(秋虎)の回想

○：突然僕のところへやってきて、今大学へ行って退学の手続きをしてきたところだ。

(十月二十六日)

コレデ自由の身になってサツパリしたとの話。

僕は退学のこととはひそかに不賛成であったがソーカといてその日は豚肉を煮て夜になるまで気炎を吐いた。そのころは僕も元氣であったが、君も中々意氣<sup>イキ</sup>壯<sup>チカ</sup>であった。そのときの清興は今に忘れられない。

○ 文科大学の遠足会で共に妙義山へ行つた時汽車の中で僕がツマラヌ俳句を作つて君に見せたところが、丁寧に批評してくれた。それから段々と君の誘掖によつて下手な十七文字も並べるようになったわけである。君は人を誘掖するのは至つて懇切でドンナつまらぬ句でも細かに批評して諄々と倦まなかつた。

○ 君はすこぶる旅行好きであつた。もつとも句を尋ねるのも一つの趣味であつたろうが、旅行そのものに大いに趣味を有ていたのは疑いない。機会さへ許さば必ず旅行に出かけたので、旅行さへすれば必ず記事がある。：箱根あたりへ旅行したとき、笠・呉座・草鞋のいでたちで番頭を驚かした事もあつた。

以上、友人得能文の回想からも子規自身の深慮により周囲の人々の反対の説得に努め、大学中退にこぎつけたあとのサツパリした気持ち<sup>イキ</sup>が伝わってくる。何度か喀血して、自らの生の長くないことを予感してあせり、自己の意志を貫いたあとのサツパリ感<sup>イキ</sup>は重い。

「僕ハ小説家トナルヲ欲セズ、詩人トナランコトヲ欲ス」



日光山東照宮唐門及拝殿 11.0×16.3cm

日光山東照宮唐門及拝殿

唐門ハ東照宮正面ニテリ四方棟唐破  
 風唐木造リ正面破風上ノ屋棟唐銅  
ニテ造レル唐ニ似タル者アリ俗呼テ恙ト  
 云ル也ナリト稱フ長サ四尺許リ額ニテ擊  
 タリ又東西ノ棟上ニ龍ニ頭ニモ唐銅ニテ  
 造リ長サ四尺余モアルベシ門正面ノ兩柱ハ昂  
 隆ノ二龍ニ梅竹ヲ添彫リ虹梁ニ龍ノ高  
 彫正面ノ虎ノ彫アリ柱ハ龍ノ彫アリ彫  
 物正面ノ木ハ孔子十哲ノ彫物向ノ破風ハ  
 鳳凰ニテ巧傲極リイヅモ藏金或赤銅ノ  
 カナ物ヲ粧ヘリ  
 拝殿ハ門内ノ正面ナリ凡ソ十二間ニ五間許リ  
 正面階段五級一面ニ藏金カナ物ヲ張ツツメ  
 濱欄高欄共ニ黒蠟色柱ハ総金外長  
 押ハ素木鳳凰ノ高彫金彩ノ色唐戸ハ  
 金ノ唐草蒔絵本間ニ重ノ格天井ナリ

だが、洋画にも理解を広げていることがうかがえる。

③華厳の滝の壮観

・紅葉の間をくねりくねりて流れ来る川一筋

・谷尽くると見れば忽ち倒まに落とす瀑布三千丈

・水煙さと立ちて落ちこむに底だに見えず

④中禅寺湖の描写

・錦繡の屏風の中に磨き出だせる一面の鏡

・龍田姫の化粧道具つくし

紅葉の中禅寺湖畔を「龍田姫の化粧道具つくし」と形容してなんとも言えぬ艶なる心情を誘う。その後、日光停車場にて「一群の紅粧来りて一枝の秋色を請ふ。折りて与へたれば之を分けて各鬢辺に挿む」

薄紅葉紅にそめよとあたへけり

子規

鳴雪翁に似合わないといふに笑われ、照れながらも子規は内心絶景の紅葉と美女に囲まれ華やいでいたと思われる。

明治二十三年、東京―日光間に鉄道が開通し、日光は避暑地として未曾有の大盛況であったということだ。この美女連は東京からの観光客であろうか。紅葉に圧倒され、美女に囲まれ、子規は至福のときを過ごしたと思うとうれしくなる。

⑤日光への帰り道（対比の表現効果）

同じ道筋なれど

（見上げるけしき 見下したるながめに異なり）

（苦しんで見るは 楽しんでみると異なり）

（朝日のいさましさは 夕日のあはれなるに異なり）

ひねもす倦むことを知らず

⑥「日光の紅葉」を読み終えて

車中にて日光の紅葉について問はれ、鳴雪翁最高の賛辞を呈する。翁曰く「天下の絶勝なり。天下の諸勝は固より知らねども或は規模小にして日光の大観なく或は大観あるもこの如き溪流と瀑布と大湖と無かるべし。されば山水の勝を兼ねてこの変幻とこの壮観とを具し而して白雲紅葉の色彩を施す者恐らく日光諸山の美に過ぎたるはなからんと。」鳴雪翁の最高の評価は全く同感の子規の賛辞といえよう。子規は再度の日光の旅を季節を変えて十分堪能できたと思われる。

華厳の滝は初回は湯水で見ることができなかった。宿願であった滝との対面は二人とも初めてであったのである。二人の期待感が年齢差を越えて響き合っており、美に対する二人の素直な心根が伝わってくる。

以上漢詩的表現によって、日光の自然が簡潔にリズム感を伴って雄渾な筆致で表現されている。少年時代から親しんでいた漢詩的表現が子規の心情を表現するのに、当時は自然な方法であったことがうかがえる。

前回（明治十九年）の旅では漢詩十三首を書き残してい

## はつめい

出身地が栃木県であることから、和田克司先生から、子規と日光とのかかわりについて調べてみてはとテーマをいただいた。年齢を経るにしたがって郷愁が募るもので、故郷への関心は高まつていくのであるが、高校卒業後ふるさとを離れ、ふるさとの文化についても、子規についてもほとんど白紙の状態からスタートした。「子規全集」の年譜から読みはじめた。

子規は日光へ二度旅をしている。

初めは明治十九年、夏季休暇中、旧藩主久松家の子息、久松定靖公に随伴して保養とコレラを避けた日光・伊香保での約五十日の旅であった。

二度目は明治二十五年内藤鳴雪を同行しての紅葉狩り、二泊三日の紀行執筆を意図した小旅行であった。

初めの旅行は「十年前の夏（随筆）」と題して、明治三十一年八月一日、反省雑誌（中央公論）に、二度目の旅は「日光の紅葉」（紀行）と題して明治二十五年十一月十一日「日本」に掲載している。

この作品を中心に読み深め、子規の日光への思い、子規の文学とのかかわりなど、深められればと念じつつ、また当時の日光の様子などにもかかわればと願いつつ研究の緒についた。

## 研究のあらまし

一 「日光の紅葉」（紀行）を読む

○ 「頼祭書屋日記」を併せて

二 「十年前の夏」（随筆）を読む

○ 書簡 明治十九年九月八日「大原恒徳」宛を併せて

三 「子規の見た日光」を終えて

## 一 「日光の紅葉」（紀行）を読む

この「日光の紅葉」の旅が行われた明治二十五年の子規の体調は「九月二日、二、三日来血痰あり。」「十一日に病状かなり回復。」とあり、比較的安定している時期であったようだ。

十月二十二日には羯南を訪ね昼食を共にし、懸案であった子規身上の相談。羯南は家族を呼ぶようにすすめる。移転費さえ工面すれば、生活費はどうかするとと言われる。大原恒徳にも羯南の奨めを伝え、許可を求める。目下「半社員」ともいふべき新聞「日本」入社にも家族があることの方が都合がよいと書き送る。

十月二十六日には、登校し、最後の授業を受け、正式に退学届を出している。小説への挫折を機に俳句への志向を

ついで出た。日ごろの寄宿舎内の句会がいかにか切磋琢磨の日常であるか推測できる。句仲間である鳴雪も健在なり。

千丈の瀧の岩間やむら紅葉

非風

湖を瀧におとすやむら紅葉

鳴雪

など翁の筆力また恐ろし、と触発されて

紅葉見え瀧見える茶屋の床几かな

子規

紅葉出て落ちこむ瀧や霧の中

子規

秋の山瀧を残して紅葉かな

子規

など、「中々にいふだけ蛇足なり。」と絶景を詠みきれない自分を自覚している。

竹村鍛あての手紙(明治二十五年十一月二日)

：先日南塘(鳴雪)先生に具して日光へ観楓に出かけ、その絶景に驚きいり候。先生と僕と合はせて数百の俳句ありといへども一句として此風光にそふ者無之存候。東照宮にて

杉の木や三百年の蔦もミチ

子規

日光東照宮についての人工美には、天然の句を対象にしている子規にとつてはごく簡単な記述にとどまっているところにならうかがえる。

日光山上にて紅葉一枝を折り、都への土産と日光停車場へ来たり候ところ、一隊の紅裾相携へ来りて紅葉一枝を乞ひ髪に相さし候をみて

一枝ハ美人に贈る紅葉哉

鳴雪

薄紅葉紅にそめよと与へけり

子規

と竹村へ書き送っている。「日光の紅葉」の絶景に沿う俳句をまだ表現するに、不十分な実力であることを厳しく指摘している。しかし、停車場で美人に囲まれ紅葉一枝を紅にそめよと与えた一コマは晴れやかで、子規にとつて日光は生涯忘れられないものとなったであろうと推測できる。竹村への手紙には、七言絶句の漢詩も添えている。

「日光の紅葉」の時期は「何やら俳句を呑み込んだような心持がして…無暗に作つてみた。」時期を過ぎ、「少しく俳句の寂といふ事を知つたやうに思ふた」の作品の具現化に苦悩していた時期である。従つて、紅葉の絶景に圧倒されて、納得のできる作品ができないあせりのようなものも受け取れる。

約一ヶ月後の「高尾紀行」十二月七日

麦蒔や束ねあげたる桑の枝

子規

松杉や枯野の中の不動堂

子規

「平凡な景、平凡な句であるけれども、こういう景をつかまへてこういう句にする事がこれまでは気のつかない事であつた。」と記しており、子規の新しい俳句開眼の句といえるところと述べられている。

この旅の体験から「平凡な景」を「平凡な句」にするということに気づいた。つまり、「高尾紀行」では、平凡な日常を描いたものも鑑賞に耐えられることを悟り、馬糞で

(高浜清宛、明治二十五年五月四日)の実践に踏み出す態勢をととのえる。また、子規が初心の人へ懇切に俳句を指導している様子が伺え、子規の周辺の人が、俳句に取り入れられる過程も納得できる。

子規は旅行が人生といえる人物で、旅によって句を多作し精力的に吟行を続けると記事が書ける。このことが「日本」の正社員への下地づくり、記事掲載への助けにもなったことであろう。

「日光の紅葉」の旅は紅葉狩りが目的であったが、六年前の旅を今一度、新しい門出の前に、旅を単純に楽しみたいというねらいもあつたように思える。鳴雪の健脚・俳句の上達ぶりに励まされながら、「日光の紅葉」を満喫でき、子規の新しい門出への奮起を促してくれたことであろう。その後、鳴雪とは「高尾紀行」・「王子紀行」と二度の旅を共にしている。

「獺祭書屋日記」から「日光の紅葉」をさぐる

この日記は漢文の記録、一行に俳句・短歌または漢詩一つという構成、規則性と正確度において貴重な文学史上の証言を残したことになったといわれている。記録することが自己表現とつながり、新聞記者となる子規が自己に課したトレーニングであったであろうといわれている。同時に俳句の可能性を広げる実験ともなったようである。特に十

月二十二日から十一月一日の記録は旅の前後の行動・心情が表示されていて興味深い。十二月一日は入社第一日、伊豫堀江沖の軍艦沈没の記事はすでに記者の目。

「日光の紅葉」の文章を楽しむ

○ 漢詩的表現・対句の多用

①冒頭文

「春の花は見るが野暮なり

秋の紅葉は見ぬが野暮なり」

日光の紅葉狩りに自己流の諺をつくり、大上段に構えて旅を位置づけている。諧謔味があり、紅葉への期待感がうかがえる。

②紅葉を背景に大谷川が蛇行して流れるさま

「錦繡帳裡に白龍を踊らすが如し」

「一步一步山幽にして景更に奇なり」

「紅葉青山水急流」

紅葉鮮やかにして躍動感が伝わり奥行きのある景が実感できる。

「四山遠ければ油絵の秋山見る如く…紅葉も皆手に取るばかり近く土佐流光琳派の画中に…」

遠景は洋画、近景は日本画に表現しつつ美しさを対比させ、臨場感を演出している。かつては西洋画排斥者であつ

の並木土手、松が杉と変わりにて、これより昔の日光領と聞  
くもゆかしく、壮心勃勃してたへがたき余には木の根、石  
の角に乗りかけて踊り上りたる馬車の乗手をはね落さんと  
するさへいと心よく感ぜられたり。(若者の旅への高揚感)

旅人を載せたる馬車や夏木立

③ 旅店は大雨の中、前の山に登る

沛然たる驟雨屋を鳴らして至り、やがて今市の方へ過ぎぬ。雨の降る谷、日の照る峰、暗き森、明るき雲、奇景は一望の中に集まり、万象は頃刻の間に変ず。

④ 若君—前の山に登らんか—余は直ちに応じ共に旅舎の裏門より出づ。余先に進み、こもをきり、露を払ひ、蜂を払ひ、路を開きてしるべす。山絶頂に登る。四望豁然として開く。大谷川日光を出で北を流れて野に入る一帯の緑樹長うして曲がる者は先に車を驅りし並杉の道なり。半日の路程歴々として四顧稍久し

(若君への献身的な働きぶり—遠近東西南北の景の描写)

⑤ 余の大望—余の志は流動して未だ定まりたる形無けれど、未来の幸運は手を空しうして余の到着を待つ者の如く；一旦余の希望に上りたる上は直ちに満足の結果を見得くべくに思はれぬ。余は大哲学者たらんと考へつつあり。：現在に於て斯の如く見地高き哲学者は未来において如何ばかり栄ゆらん、余自身だに之を想像する力無かりき。

(多感な無邪気とも思える野望・自信)

⑥ 東照宮に詣づ。大谷川の神橋を渡り日光山へ入る。

家康を厭ふ余は秀吉の霊をまつりたるならばとのみ思ひつづけぬ。(若者の吐露)

⑦ 初めての乗馬にて霧降滝へ

馬にて霧降滝へ馬を知らぬは余一人なり、最もおとなしく鈍き馬に乗せられる。往來の人の眼を驚かして、心驕りて、(同窓の友と逢う) 尻のすわりおほつかなき心地すれど、あたら夜の錦ならんかしと思ふもをかし。帰路は良き馬に乗り変へたれどなほおくれがちなり。(懸命の背伸び)

三騎先へ一騎おくる青嵐

⑧ 中禅寺の湖

一たび余が目に触れしより後、再び忘るべからざるの地なり。

○ 中禅寺湖畔にただひとり住みたしとの念は絶えず余が心中に往來して神秘は常に余を待ちつつあり。

○ 余は始めてここに神秘的美を感得したるが如し。

(絶景に心酔し絶唱)

⑨ 千丈ヶ原を経て湯元へ—竜頭の瀧を見て湯の湖へ

路々の奇草珍花数を知らず原尽きて森に入る。湯あみせんとて浴衣に手拭提げて半町ばかり行けば湯壺は板一枚の覆いもなく、山より引ききたる笥の湯、あたりにこぼれて一面に硫黄凝り固まりたるその臭ひたへ難し。

名も知らぬ草もの凄き茂りかな

るが、「日光の紅葉」では漢詩は一首も掲載されていない。しかし漢詩的表現は十分に生かされており、それに値する「日光の紅葉」であった。

○宇都宮の宿にて

「( )はいくさの跡とてはたこやはまだ何となく騒がしきに。」とあるが戊辰戦争後のいくさは考えられない。栃木県の歴史資料によると一八九二年(明治二十五年)、「陸軍特別大演習に明治天皇行幸」とあるので、この「陸軍大演習」が妥当と考えられる。十月二十一日から十月二十七日に行われ、その時の余韻が濃厚に残っていたのであろう。

○大雨に遭遇

子規は宇都宮、日光を訪れるたびに大雨にあっている。「宇都宮に一泊せし日は、朝来の大雨盆を傾けていつ晴るとも知らぬ、何が吉日ぞ。」とほやいている。「はて知らずの記」の旅のときも、「…神鳴りおどろしう今にも落ちんかと許り」とある。また、「もしこの夜、屋を震撼するような大雷雨が鬱積した塵気を一掃するのなかつたら、子規は恐らくその宗匠との対座には堪えなかつたであらう。」

(碧梧桐の「子規の回想」より引用)

栃木県の、特に県北の風土は、関東の北部にあつて海から離れているため、気候は内陸性となり、寒暑の格差が激しい。降水量は夏季に多く、特に八・九月ころに集中している。最近のゲリラ豪雨現象に似ていて、連日のように午

後大雨となり、雷を伴い落雷も頻発していた。一過の後はからりと晴れ気温も下がり快い夕暮れになるのであった。日光山地はじめ北西部の山岳地帯は年間降水量二千ミリを越える多雨地帯であった。子規はこの現象に訪れることに遭遇している。みごとな日光の杉並木や奥行きのある神秘的な森林の風景もこの風土によるものであろう。

⑦俳句について

文章中に俳句三十四句が載せられており子規二十五句、鳴雪八句、非風一句となつている。「日光の紅葉」の美しさが見たままに表現されており、子規、鳴雪の感動が伝わってくる。鳴雪は子規より二十歳年上であるが、出発時の腹痛はどこ吹く風、句境大いに進み、軽快な物腰で若々しく作句に励んでいる。互いに触発し合い楽しんでいるが、鳴雪翁に余裕を感じる。

日光へのあいさつ句

二荒や紅葉もみぢの山かつら

子規

鳴雪翁へのあいさつ句

先生の草鞋も見たり紅葉狩

子規

前回の時は喝水のため、華厳の滝を見ることができず、今回の旅の目的の一つでもあった華厳の滝の壮観を目の当たりにすることができた。あまりの絶景に圧倒されて句ができなかつたが、常盤会寄宿舎の友人新海非風の句が口を

後、再び忘れべからざるの地なり。

・ 黒きまで濃き山の緑

・ 静かなる水の色

・ 動かざる空気

・ 淋しく光る夕日

・ 死人の額の如き冷氣

・ 黙したる木の葉

・ 太古の苔

・ 不思議の草花

「余は中禅寺湖畔に只ひとり住みたしとの念絶えず余が心中に往來して、神秘は常に余を待ちつつあり。恍たり、惚たり、盼たり、情たり」

中禅寺湖畔の絶景を具体的に鮮明に神秘的に表現して、切々と神々しいばかりの感動が十二年たつて書かれたのにもかかわらず伝わってくる。自然を自分の目でじかに見て、その姿をありのままに表現するという写實的な態度が子規の中にしつかりと定着していたから感動が伝わってくるのである。この旅の中で漢詩十三首、短歌七首を作っており、漢詩稿、竹乃里歌（明治十九年）に掲載されている。本文章中の俳句十二句は俳句稿（明治三十一年）に掲載されている。

寒山落木（明治十九年）——抹消句

日光もとはさぬ杉のしげりかな

抹消句になっており、本文中の十二句は明治三十一年に反省雑誌に掲載の際に初回、第二回の日光の旅を思い起こして作られたものと思われる。湯元での朝下女の来て「ゆふべは狼の吠えしを聴きたまひしか」や「舟を借りて又魚

を見る：二十余尾を獲て帰る」など、子規にとつては初めての愉快な体験であつたらうし、「再び忘るべからざるの地なり」となり、俳句を詠む生活の中で何度も日光を思い起こすことになつたのであろう。旅を共にした若君はますます美しく、立派に優しく成長されたにもかかわらず早世されてしまわれ、切々たる哀惜の情が綴られている。お亡くなりになつたあと、子規の体調が悪化し、現在は「あらぬかたはとなりて一步も能はず」「十年の昔、無限の希望を負ひて山水を跋涉し殆んど一点の苦も無しに未来の幸運を望みし時、誰か今日の境遇あることを期せんや。思ふて両毛の會遊に到ればうたた心を悩ましむる者無きにあらず。中禅寺の湖神は今猶余を待つや否や。魂飛び夢通ふ涼風の暁月明の夕。」

青春真つ只中（ベースボール狂時代でもあつた）、健脚に頼みて日光を訪ね歩いた思い出が病の子規を一瞬たりとも苦痛を柔らげていたと思うと、ひとときであつても日光との出会いが子規にあつたことに感謝したい。

◎書簡 明治十九年九月八日 大原恒徳宛を読む

（旧藩主の子息久松定靖に従い日光・伊香保を漫遊したことを叔父大原氏に報告した書簡）

- ① 日時を追つて行動内容を詳細に記述している。
- ② 若君の行動をお守りし、勇気を養う立場で記述。

ささも句になるのだと感得した。そしてこの旅を「馬糞紀行」と名づけるが、のちに「高尾紀行」とあらためる。

「日光の紅葉」の旅はこの俳句開眼の一ヶ月前であった。六年前からの宿願であった華嚴の滝の絶景に感動する。友人の非風や鳴雪の句に触発されて三句を詠む。しかし「いふだけが蛇足なり。」と自覚する。日光の紅葉の絶景を實際に目にただけに自らの句を「蛇足なり」と評価しなければならぬことへの「無念さ」がきつと古俳句の分類や仲間とのグループ研究に拍車がかかり、一カ月後の新しい俳句眼の獲得に導かれていったものと思われる。「平凡な景」を「平凡な句」に、日光の絶景をまのあたりにしたあとだけに、新鮮に感得し俳句開眼への道が開かれたのであろう。

## 二 「十年前の夏」を読む

この文章は、冒頭にあるように明治十九年の夏に「若君の日光漫遊に俱せよ」とのうれしき恩命によって、若君に随行し、日光・伊香保を約五十日旅をしたときの記録である。そして、この旅は、明治三十一年、反省雑誌（中央公論）に八月一日づけで発表されたものである。

従って、明治十九年のさわめて若く健康な年代と明治三十一年の短歌革新にのりだし東京でのホトトギスの刊行、そして、子規自身の体調は人力車でなければ移動でき

ない状態であったことを考え合わせながら読みすすめていきたい。

同行者 ○若 君——旧藩主、久松家の子息定靖公、子規より六歳年少。

○内藤氏——内藤鳴雪の弟、常盤会寄宿舎委員  
○鷹見氏——子規の祖母で佐伯村の妹の婚家の  
子息、子規とまた従兄弟。

① 冒頭文——首を廻らせれば十二年の昔となりぬ

余は

- ・年若く
- ・身すこやかに
- ・行末は無限に長く
- ・希望はいたずらに大

余は第一高等中学校の六十日の夏休み休暇中、知人の宅に寄宿のところに若君の日光漫遊に俱せよとのうれしき恩命が下された。

② 東京から日光の宿へ——（明治十八年——東北本線大宮・宇都宮間開通）

風雨はげしき朝上野から宇都宮へ（一泊）、翌日晴天、貸切馬車にて、日光例幣使街道を経て日光へ。下宿の外に天地あるを知らぬ余に（汽車の上等・旅籠の上等・馬車の借り切り）の旅おもしろし。況して旅行好きの余には尋常の山、尋常の水、尋常の野も始めて見る者は興を催す。尋常

規選集「子規の一生」を軸に読み比べ、他の作品へも読み広げて集めることができた。どちらの年譜からも子規への限らない愛情が読み取れた。「十年前の夏」で共に旅した定靖公のその後の交流についても、年譜によると明治二十五年十一月には常盤会寄宿舎で非風・小川・天岸らも共に謡曲を吟じて団らんしたり、翌々日には子規の家で謡曲会を催したりして、若君としての交流でなく、仲間として交流が続いたことがわかる。また「筆まかせ第四編」では「久松定靖君の奇話」と題して、定靖君曰く「哲学とは何ぞ。」升曰くと主張を述べ合い、弟のごとく相對している様子が描かれている。また「久松定靖君他の寢所に潜む」として大原尚恒（恒徳の子息）が久松邸にいたとき、ある朝尚恒の祖母が来て寢床がそのままであるため小言を言い終わらぬうちに「蒲団がムクムクとして動く、祖母大いに驚く。定靖公頭を頭はして曰く、僕なり僕なり、大原の寢所甚だ温カナリ。故に潜かに臥して一快を取るのみ」など日光の旅で歩きまわった同志の和が広がり、深まっていることがうなづける。明治三十年夏にはお亡くなりになるが、子規たちと心から信頼し合える関係で仲間との真の交流の楽しさを味わうことのできた晩年であったと思われる。

子規と出会った人々は子規に魅せられ仲間引き入れられていく。五友の会・常盤会の仲間がスタートであるが愛媛を超えて交友が広がっていく。新聞「日本」の読者で、

短歌・俳句に触発され、子規庵を訪ねていた長塚節は茨城県結城の豪農の長男であった。神経を病み療養に治療にと上京の際は子規を訪ねた。農作物を背負って運んでくれたりもした。その節に明治三十五・八・十五の手紙で「村民の子弟を教育せよ。一家の私事ダケデ忙シイトイフヨウナ能ナシデハ役ニタヌ、ソノカタはら一村ノ経営位ニハ任ジナクテハ行カヌ」と節の農村での生き方を指導しているのだ。最晩年の生きるのが苦痛の中で節を励ましている。節からも田舎の秋の様子を手紙で伝えてきた。明治三十四年「仰臥漫録」から「田舎ノ趣見たが如シ一寸往テ見タイ、母ハ稲ノ一穂ヲ枕元ノ畳ノヘリニサシタ」とあり、子規の気持ちを感じた母は無言で稲穂を摘んできて、それを畳のへりに挿した。稲穂という実物を介して味わわせている。この様が積み重ねられ、子規の自然を確かに見る審美眼を養っていったと思うと感慨深い。この目が日光中禅寺湖畔の神秘的美への開眼にもかわって行ったものと思える。この実景を見て神秘の虜になった子規は生涯、折あるごとにあの青春期の純粹な陶酔境を思い起こし文学の革新にまた、生きる力の糧になっていただろうと思われる。

○ 日光を題材とした他の短歌・俳句・随筆など

「竹の里歌」(明治十九年) 日光を詠んだ歌七首

(資料参照)

⑩ 湯の湖―舟を借りて又漁を見る、二十余尾獲て帰る。今宵は首筋なほ寒くおぼゆるに蒲団引きかづきて涼しき夢を結びしが翌朝、下女の来てゆふべは狼の吠えしを聴きたまはざりしかと語りぬ。舟を借り又魚を見る。静かに水の底をうかがひつ、漁師は三又のやすを手に取り船端に立ちて、見すましつつ忽然と突く。：一丈の竿、六尺の深さ、突く處は必ず首と定まりて一たびも誤らず。二十余尾を獲て帰る。(新たな体験)

ねらはれし魚の命や山清水

⑪ 八月六日より八月二十九日は伊香保に静養中の老公久松勝成(定靖の父)と合流する。

「某亭に酒を酌んだ折、居合せた長州人にて、維新の際、兵を率いて松山に來た男に勝成公が挨拶したので不平に堪えず俚歌を出ぬ声ふりしほつて放吟」という失態を演じてしまった自分に「今思ひ出すだに冷汗流るる心地すれど、当年の意気は天を衝くの勢ひやありけん。」と我が行為を反省しつつ奔放に生きていた青年の姿を懐かしんでいる民権少年のおもかげや旧藩士の矜持の表出ともうかがえる。

⑫ 若君との思い出―本文より

君はその後、余等と共に本郷の寄宿舎に住み給ひしことさへあり、いとむつまじくつかへまつりつ、御生まれやさしく少しも人におごりたまはず、よろづにさかしく物のことわりをことごとくにわきまへおはしたる、御行末も榮えた

まはんとのみ祈りしを去年の夏はかなくも大磯の露と消えたまひにき。余が最後にまみえたるは二十八年の一月かと覚ゆ。：新年の御よろこびを申しあげしに、このごろはいたつきはいかにや、などねもごろにはせ給ふ。久しくまみえざりしかば、御有様いたくねびまさりて、光さへそひたまひしにいとかたじけなく覚えてさがりしはやがて終の御別れとぞなりける。(中略)

◎「十年前の夏」を読み終えて

若君の日光漫遊に俱せよとの命を受けたときは、子規は二十歳、心身ともに健康にて、将来の大志は希望に満ちていて全てかなうと信じ青春を謳歌していた時期であった。貧乏書生である子規にぜいたくな殿様旅行が降つてわいたようなものであった。汽車の上等、旅籠の上等、馬車の借り切り、すべてが初めてのうれしい旅であるから悪路ではね落されんとするさえ快く感じられる高揚した気持ちで俳句にも文章にも表出している。また、人工美より天然の美の表現を重視していることも感じ取ることができる。初めての乗馬の経験で、おぼつかない心地であるが、往來の見上げる人々の目を意識して

夏服は若殿ぶりの馬上かな

すっかり若殿ぶりのほこらしげな出立もこつけない一面を見せて楽しい。中禅寺湖では一たび余が目に触れしより

たが最晩年は建造物の高い芸術性にも価値を見出していたと思われる。

○「病牀六尺」(四三) 明治三十五年六月二十四日

写真の効用について「日光を知らぬ人にも此写真帖を見れば其人は日光へ往つた感じになるであらう。西洋に往くことのできない人さへもこの種の写真帖を見たらば西洋へ往つたと同じ様な感じになることが出来る。」と述べている。果たせなかつた西洋と心身ともに健康で日光の山々を踏破し、旅を満喫した青春を對比させつつ、日一日と近づいて来る死の足音の中でも日光の旅を回想し、楽しいひとときを持たたのであらう。

明治三十五年六月二十日より「麻痺剤服用日記」を記している。虚子たちが当番で子規の看護にあたっている。その上に連日來客あり、地方からのお届物あり。七月六日など、茶会席料理、碧梧桐・四方太・虚子会す。鳴雪病床を訪れ、慰め励ます。苦痛がはじまると、隣から羯南がかけつけてきて手を握り額を撫でてくれる。そうすると子規はやすらかになり、苦痛から立ち直ることができたのだ。

「草花帖」や「玩具帖」の写生にもとりかかっている。鳴雪・虚子・紅緑・碧梧桐が参加しての輪講会に子規は背を向けたまま意見を述べた。苦痛激しくなり中座せんかと問

うも継続を指示。紅緑が去るにあたり「お大事に」と言うことと「ありがとう明日までに死ぬかもしれません。」と他人のことのように答えて最後の輪講会になった。このような状況の中でも俳句は詠まれ、詠もうとする意識は持ち続けられた。羯南とは十歳、鳴雪とは二十歳の年齢差にもかかわらず、長幼の意識をふり払い、対等に真理を追究する仲間として、ある時は失礼を詫び合いつつ、認め合い磨き合っている。定靖公に対しても旧藩主の子息の立場より仲間としての対等の人間愛に貫かれてグループ活動にとけ合っている。この情愛豊かな人間愛をもって共に向上しようと磨きあっている姿勢は、現代の私たちに人間どうしの生き方への範を示しているように思えてならない。かつて司馬遼太郎先生が松山での講演の際、「子規は文学の明治維新を行つた」と話されたこと記憶しているが、作品を読んでいると、子規は人間どうしのあり方にも新しい時代のあり方を示していると思えてならない。

### おわりに

「子規の見た日光」を終えるにあたり、たくさんの方の助言をいただいたり資料を寄せていただいたりで感謝申しあげます。子規記念博物館へも通い指導をいただいた。特に日光図書館からは、明治時代の旅行ガイドブックや町並みの

・靖公帰路につく鷹見氏従ふ

・靖公も同意を表せられ、随行せしを以つて路を開くに更に丁寧なり

・靖公は概ね山籠りに依り玉へり

・靖公 徒歩復籠を用ゐず

③ 風土の違いなど

此地は蚊なしといへども蚋<sup>ホト</sup>多し―鷹見氏蚋の害を受く

湯元―此温泉は言ふに足らざる者なし

④ 東照宮を詳述

・美麗壯觀筆舌に尽し難し他日写真を送るべし  
以て一斑を知り玉へ。

―写真とその解説、冒頭に掲載―

(写真の裏の解説は明治十五年に出版された「日光名所図絵」を参照して書かれたものと思われる。)

・家康の批判の記述なし

⑤ 伊香保の行動のあらまし

旧長州藩士への大殿の挨拶に不満をいだき俚歌を放吟した  
ことには触れず

⑥ 定靖公からの恩賞は詳しく報告

◎書簡を読み終えて

旧藩主の子息久松定靖に従い、日光・伊香保を漫遊した

ことを子規の後見人であり、郷里松山にあって、親族を束ねていた叔父大原恒徳に報告した書簡である。

正岡家・大原家ともによるこばしいことで、子規が粗相なく務め上げてほしいと念じていたはずである。この報告は親族一同に披露されるだろうと予期して日々の活動を子規は報告している。東照宮など詳述しながらも家康批判や伊香保での旧藩主の面前での旧長州藩士への俚歌の放吟など、身内の者が心配しそうな行為については省いている。旅のねらいの若君の勇気を養うような場面を伝えており、誠実に任務を果たしている姿が伝わってくる。

なお、この旅行については、はじめ洋服代拾圓を賜り、支度金として別に五圓をくだされ、旅費は官費にて、日当は十錢で、上京後に定靖公より慰勞として緋一卷及び金五圓下賜された。ご褒美であろうと受け取れ、よい旅であったことの裏づけとみてよいだろう。

なお、書簡中の「美麗壯觀筆紙に尽し難し、他日写真を送るべく以つて一斑を知り玉へ」は実際に送付され、現在も保管されている。

三 「子規の見た日光」を終えて

「日光の紅葉」「十年前の夏」の読み深めを研究の手はじめとして、講談社版「子規全集」の年譜、増進会出版社

・「子規博だより」

(松山市立子規記念博物館友の会発行)

「子規の見た明治① 日光東照宮」 18—1

(平成十年六月)

「子規の見た明治② 日光山」 18—2

(平成十年六月)

「子規山脈事典」

く：日光諸山の美に過ぎたるはなからんと

明治三十年九月三日 (三十一歳)

「病牀日記」「杉十句」の九句目

家康の魂ひやかに杉木立

明治三十一年八月一日 (三十二歳)

初めての日光の旅を反省雑誌(中央公論)に

「十年前の夏」(随筆)として発表

明治三十一年五月十七日「竹の里歌」(冬) (三十二歳)

二荒の山来てみれば玉光り黄金かがやく杉の下陰

明治三十一年八月十二日 (三十二歳)

「竹の里歌」「足た、は」

足た、ば二荒のおくの水海に

ひとり隠れて月を見ましを

明治三十三年十一月二十四日 (三十四歳)

「人の紅葉狩」(随筆) 新聞「日本」に掲載

子規の短歌の仲間たちが日光の紅葉狩の帰り、夜更に

子規を訪ね、歌・句・日光土産で紅葉狩を伝える。

明治三十五年六月二十四日 (三十六歳)

「病床六尺」で写真の効用について、写真帳の日光を例

に解説する

明治三十五年七月二十四日 (三十六歳)

「俳句稿以後」「仰臥漫録二」「茂り」

日光ハ杉茂り箔ノ光カナ

資料1 子規の見た日光 年譜

明治十九年(1886)七月十九日〜八月二十九日(二十歳)

初めての日光の旅(旧藩主子息・定靖公の随伴)

明治三十一年「十年前の夏」(随筆)として発表

漢詩十三首、短歌七首、俳句一句 名所の写真と解説

「再び忘るべからずの地なり。…余は始めてここに神秘的

的美を感得したるが如し…中禅寺湖にひとり住みたし

の念は余の心中に往来…」

明治二十五年十月二十九日〜十月三十一日 (二十六歳)

二度目の日光の旅 鳴雪同伴、

この旅の体験を「日光の紅葉」(紀行)として明治二

十五年十一月、新聞「日本」に発表

「天下の絶勝なり。山水の勝を兼ねて、この変幻とこ

の壯観とを具して、白雲・紅葉の色彩を施す者恐ら

「竹の里歌」(明治三十一年)

「あした、は」

足た、ば二荒のおくの水海にひとり隠れて月を見ましを  
補陀落―二荒―音読みにつこう(日光)、水海―中禪寺湖  
足なへの身をかこちつつ郷愁をかみしめながらも自分の  
心を奮いたたせるかのように「足が立つならば」と願  
望をかきたてているのである。(子規会―宇和氏の発表から  
引用)

子規の願望は箱根・富士山・日光・北海道さらにヒマラ  
ヤ・中国の黄河へと無限に広がる。実に明るく雄々しくユー  
モラス。

この歌の中で跋涉したのは箱根と日光であり、日光では  
絶唱している。

「病牀日記」明治三十年九月三日

「杉十句」の九句目

家康の魂ひや、かに杉木立

(家康の御霊を祭っている東照宮の杉木立に秋風が吹い  
てきた、ひや、かな靈氣を回想)

「人の紅葉狩」(随筆) 明治三十三年十一月二十四日

「日本」に掲載

子規の短歌の仲間たちが日光の紅葉狩の帰り、夜更に立

ち寄る。十月二十九日には左千夫と素明(画家・初対面)  
が華嚴の滝近くのたくさんの紅葉の枝を持ち来る。翌日郵  
便にて素明の絵十枚、左千夫の歌十首届く。

十一月五日朝「日光山中」のハガキ来る。差出人の名な  
し。なぞ解きめく。その夜更、ガラス戸の外でガヤガヤ。ガ  
ラス戸越に「先生」という声かすかに、格堂であった。「日  
光の帰りです。」茂春、三子、巴子と共に、錦木、山鳥、さ  
るおがせをまといたる枯枝などのお土産、錦木に結びつけ  
たる紙片に俳句、山鳥の足にも結びし短歌、封書一通残し  
去る。彼等が旅館のつれづれに競いしものと思われる。歌  
六首、句七句、読んでいきながら子規は吹きだしてしまっ  
た。

「同じ夜深に一度は表門より、一度は裏木戸より歌の友に  
驚かされて、余は二度日光の紅葉を見るを得たり。病床の  
臥遊これにて足りなん。」

二荒の山のもみじを白瓶の小瓶にさして臥しながら見る

「俳句稿以後」(明治三十五年)

夏木(茂り二十一句) 仰臥漫録二、「日本」明治三十五・

七・二十四「茂り」

日光ハ杉茂り箔ノ光カナ

日光の奥深く暗くまで生い茂る杉林、その中にひときわ  
輝く寺社の箔の冷え。子規は自然の景観を特に評価してい

# 漱石の観瀑案内人の訂正など

戒能申脩

## 一、案内人の訂正

明治二十八年十一月三日（当時天長節と言ひ祝祭日）、夏目漱石を白猪・唐岬の両滝見物に案内したのは、近藤本家（温泉郡三内村大字河之内日浦、現東温市河之内日浦）の下男佐伯好藏であると『子規会誌』（八十一号 平成十一年四月）に発表した。これは好藏の孫に当たる佐伯民恵氏（河之内音田）に聞いたものであったが、最近になり自宅の『続 川内町誌』（昭和四十三年五月三十日川内町発行）p.291に次のような民恵氏の書き込みがあったと家人からコピーが送られてきた。

明治六年二月二十五日生レ 当時二十二才

佐伯宇太郎 近藤本家奉公中 瓢を持ち

近藤林内様の御供スルト 父生前ノ伝言であります

叔母トク 佐伯孫四郎母

（文字・抹消部分・加筆等コピーのまま）

これで一代ずれていたことが判明したわけであるが、念

のために奉公に行ったこの家の最初の人から説明を加えておく。

① 佐伯次郎右衛門

② 佐伯好藏

天保九年〜大正四年十二月五日（87歳）越智郡の大島から杜氏として近藤本家（造り酒屋）に来ていた。佐伯家の養子に入る。

③ 佐伯宇太郎

明治六年二月二十五日〜昭和二十八年十一月六日（80歳）

佐伯民恵

明治三十五年八月十二日〜平成六年十月二十日（93歳）「渋柿」の俳人 佐伯巨星塔門 恵雨の俳号で「白猪吟社」・「川内吟社」で活躍。

佐伯 清

現当主

提供や子規の散策した道を实地に歩いた貴重な報告をいただいた。地の利を生かした取り組みに感謝申しあげる。

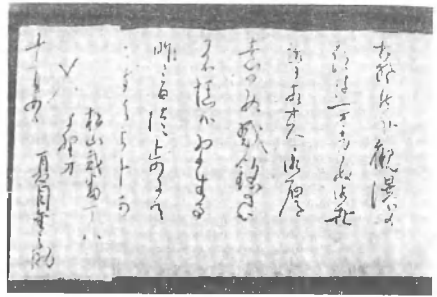
今年の正月に教え子たちの同期会に出席した折、合唱を聞いてほしいとのこと何の曲だろうと思っていたら、「君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く」と吟じてくれた。三十年前、先輩の先生方のご助言をいただきながら、子規を教材として学んだ生徒たちである。「ばくたちは三十年前に子規さんを勉強した。わたしはあの時、子規さんのお嫁さんになりたいと発表した。」など当時を自慢しあいながらにぎわった。ふるさとの子規さんだから指導者の如何にかかわらず心の中に生きていくのだと実感し、励まされた。

幼いころ杉並木に沿って母の実家に通ったことなどの記憶をよみがえらせながら読み進められたことに感謝する。そして、子規が「中禅寺の湖は：余が目に触れしより後、再び忘るべからずの地なり。」と切々と書いていたことがまさに子規の心に終生鮮やかに生き続けていた。そのことを作品を通して確信できたことが至上の喜びである。つたない研究であったが、進めるに従って、テーマに対しての資料が少しずつ見え始めてきた。「子規と日光」関係の作品がこれほどあるとは思いがけないことであった。子規の膨大な作品の中には、私の知らない資料が潜んでいるに違いない。これからも汲み上げながらつないでいきたいと願っている。

#### ◎中心資料

- 「十年前の夏」―子規全集第十二巻隨筆（講談社）
  - 「日光の紅葉」―子規全集第十三巻小説紀行（講談社）
  - ・「子規全集」第二十二巻 年譜・資料（講談社）
  - ・「子規の一生」―子規選集十四（増進社出版社）
- ◎主な参考図書

- ・「人間正岡子規」（関泰仕財団）―和田茂樹
- ・「正岡子規入門」（思文閣出版）―和田克司編集
- ・「正岡子規―人と文学―」（愛媛文化双書41）  
―越智通敏
- ・「友人子規」（博文堂書房）―柳原極堂
- ・俳句シリーズ「人と作品4―正岡子規」（桜楓社）  
―松井利彦
- ・「正岡子規―近代日本詩人選3」（筑摩書房）  
―岡井隆
- ・「正岡子規・その文学」（講談社）―久保田正文
- ・「子規山脈」（NHK出版）―坪内稔典
- ・「明治廿五年九月のほととぎす」（未知谷）  
―遠藤利国
- ・「栃木県の歴史」県史9（山川出版社）
- ・「栃木県の歴史散歩」（山川出版社）  
―栃木県歴史散歩編集委員会編
- ・「日光」（勉誠出版）―立松和平



② 漱石の礼状(明治28年)

原へ着 夫より

汽車にて無事帰松

仕候 先は右御礼まで

勿々如此に御座候

草々不一

十一月四日

夏目金之助

近藤様

宿翌日雨中蓑と笠にて白猪唐岬に瀑一覽致候近藤宅にて

観瀑の書画帳一覽中に貴兄の発句及び歌あり発句も書も

頗る拙の様に思はれ候僕此書画帳を見て貴兄の処に至り

不覚破顔微笑す番頭傍にありて曰く其内には甚だ拙なる

のも御座りますと僕叱して言う見苦しき故に笑えるにあ

らず知人あるが為なり(後略)

これにより漱石の観瀑の時の状態(実際には奉公人が背

丈に余る草を鎌で刈りながら道を開けて進んだ所もある)

や子規の句も書も拙いと言っていること、この後ここでは

省略したが子規の故郷である松山・愛媛に愛想が尽きたと

言っているのである。

(封筒)

松山二番町八

上野方

夏目金之助

十一月四日

## 五、子規への手紙

漱石は、近藤本家へ礼状を書いた二日後、書画帳を見た感想を子規に率直に書き送っている。③(一部原文のまま

引用)

(前略)小生去る二日観瀑の為め河の内へ参り近藤氏へ一

## 六、近藤林内翁のこと

近藤本家とか林内翁とか言っても今では知らない人がほとんどである。『川内町誌』に詳述されているのでこの機会に許可を得て略歴の所だけ全文引用する。④

近藤林兵衛是正は三内村大字河之内日浦の人である。(明治三年八月林内と改名した)。文政元年正月二日同村次右衛門の第三子として生まれた。生まれつき聰明穎悟、十歳の時、本家近藤是衡の養子となり、二十一歳で家を継ぎ、周桑郡妙口村の里正曾我部太郎松の娘を妻女として迎えた。

資料2 竹の里歌

明治十九年 日光でよんだ短歌七首

霧降瀧

岩ふみて落ちくる瀧を仰ぎ見れば

空にしられぬ霧そふりける

裏見瀧

うちあけて心のそこも見せながら

瀧の名こそはうらみなりけり

龍頭瀑

さかまきし水のしら玉こきちりて

苔むす岩に花もさきけり

含満淵の不動尊を拝みて

すさまじくなりてうづまく水にだも

ゆるがぬ岩にたてる御佛

慈観瀧

落つる水の細くわかれて涼しくも

風にゆらめく玉簾哉

湯瀧

水とのみ思ひしものを流れつる

瀧はわきたついでゆなりけり

中禅寺湖

いく坂をのほりのほりて尋ねきし

山の上にもうみを見る哉

資料3 子規の漢詩

日光神橋

空山飛錫一千年 金碧煌煌雲路新

橋架懸厓龍背仄 莓苔默默大如鱗

日光の神橋

空山の飛錫 一千年

金碧煌々 雲路新たなり

橋は懸厓に架かつて 竜背仄ち

莓苔点々 大なること鱗の如し

傳言勝道始開土荒双龍跨溪爲橋神橋即其遺跡也

傳へて言ふ。勝道始めて土荒を開きしとき、双龍溪を

過ぎて橋を爲す。神橋即ち其の遺跡なりと。

は山野路傍に樹木を植えて公益を図るなど枚挙に遑ない。又厚く仏を信じ、天保十年正月十六日から明治二十年まで毎日念仏一万遍、光明真言一千遍を念誦し、行住座臥念珠を離さず、横死者又は後継者なき人のため仏事を営み冥福を祈る事数十回に及んだという。又仏像を刻み寺を興し金穀の喜捨をするなど善行其の数を知らない。この故に明治以前旧藩主より賞状或は賞品を受けたこと数回、明治以後賞状及金銀盃を受けたこと十回、又仏を信ずること厚きをもつて真言宗管長より数回に亘り受賞した。林内歿後特に菩薩の諡号を受けた。これは俗人として例のないことではなからうか。

林内また風雅の道を好み、俳句を能くし号を五楊と言った。また白猪唐岬の二瀑を発見して道をつけ橋をかけ、これを世人に紹介した。かかる偉大な仁の人林内翁も天命は如何ともし難く、明治二十一年一月四日年七十にして逝去せられた。遠近訃を聞き哀悼せぬ者はなかった。林内歿後二年、碑を建て銘を録して其善行を表彰した。その墓は河之内日浦にある。

恭恵院清翁是正慈善菩薩 近藤林内是正

明治二十年一月四日歿

写真① 近藤本家の書画帳 子規の書(和歌と俳句)『続

川内町誌』(昭和四十三年五月三十日 川内町発行 p 290)による。

② 近藤本家宛漱石の札状 『続 川内町誌』(p 290)による。

③ 近藤林内翁宅 『川内町誌』(昭和三十六年四月十日 川内町発行 p 514)による。

抜粹④ 漱石の札状 『漱石全集』第十四書簡集(昭和

四十一年十二月二十四日岩波書店発行 p 74)による。

⑤ 子規宛漱石の書状 『漱石全集』第十四 書簡集 (p 75)による。

⑥ 近藤林内略伝 『川内町誌』第十三章 人物小伝一 近藤林内是正 『伊予善行録』(p 563・p 564)による。

(東温市市役所川内支所・岩波書店漱石全集編集室の転載許可済み)

(本会理事 平成二十二年十二月例会卓話)

(①②③)と三代にわたり近藤本家で下男奉公)

## 二、奉公人の仕事

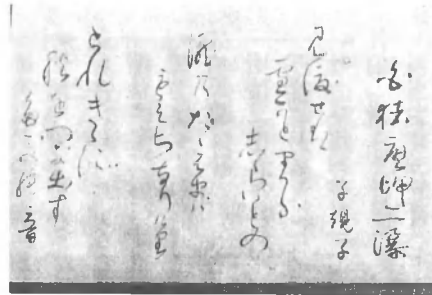
当時近藤本家では、近隣の若者がいつも複数で下男奉公していた。掃除や使い走りはもちろん、造り酒屋(銘柄「朝みどり」・「根引松」)であったから、当時は皆一升徳利を持って買いくるのでそのつぎ分けの手伝いや用がたまるとお城下へ出かけたりました。

また祖父が奉公していたという古老の話によると、どうも近隣の若者が徴兵検査までの何年間かを奉公に上がって教育を受けていたようである。躰ばかりでなく手習いもしっかり身につけて帰っていたそうである。

## 三、子規の揮毫

近藤本家は、子規の母八重のいとこである三並良(五友の一人)の母方の親戚に当たり、漱石が宿泊したのも子規の紹介によるものと言われている。この時漱石は、近藤家の書画帳で子規の書を見た。

子規は漱石よりも四年早く、明治二十四年八月十九日、五友のうち太田柴洲・竹村黄塔と同行、近藤家に一泊、翌二十日観瀑の後再び近藤家に戻り、短歌と俳句とを認めて帰っている。



① 正岡子規白猪、唐岬観瀑の歌と句(明治24年)

## 四、漱石の礼状

漱石は、帰松後近藤本家へ次のような礼状を出している。

白猪唐岬二瀑

子規子

見渡せば

雪かともがふ

しらいと

滝のたえまは

もみじなりけり

たれきくに(誰聞くに)

秋をつき出す

たきの音

拝啓仕候 観瀑の

節は一方ならぬ御世

話に相成 御厚

意の段感銘の至

に不堪候 野生事

昨三日徒歩にて

六時頃平井河

子規深展 93～102 山下一海 「未来図」 平成二十一、一～十

子規の「切字」論と、その流れ 45～55 復本一郎 「若竹」 平成二十一、一～十二

「氷魚」のことから 96～100、102～105 岡本八千代 「三河アララギ」 平成二十一、一～五、七～十二

『散策集』注釈 5 「子規会誌」 120

子規の文章についての一考察 忽那哲 「子規会誌」 120

「子規」私記 61～66 伊吹純 「幻桃」 63～68

正岡子規と俳句 3～8 橋本直 「ユーキャン俳句倶楽部」 平成二十一、一～十一

子規の風・子規からの風 3・4 中原幸子 「子規新報」 141、142

子規博より 渡部光一郎 「子規新報」 141～144

子規敬慕〈松山子規会講演〉 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十一、二

「発句始」 稲畑廣太郎 「神奈川近代文学館」 103

子規と周辺の偉大な人々・私の松山 二宮一知 「万象」 平成二十一、三

子規・虚子周辺 32～35 平岡まさる 「花みかん」 33

滑稽俳句の系譜 復本一郎 「俳壇」 平成二十一、四

子規・節・茂吉の「感情的写生歌」または「写生的主情

歌」の継承―写生・感情・喩をめぐる(前編) 松野高尚 「長塚節の文学」 15

『病床六尺』第一回の構造―その成立に関する一考察― 乙幡英剛 「子規研究」 60

正岡子規と万葉集 6、7 片山武 「子規研究」 60、61

子規の長歌「花の夕顔」について 伊吹純 「子規研究」 60

正岡子規の「煩悶」について 黒河悦子 「虚子記念文学館館報」 17

これだけは知っておきたい近代名歌30の味わい方(いたつきの…)正岡子規 渡部光一郎 「短歌」 平成二十一、五

熱の時代―子規を中心として― わたなべじゅんこ 「俳壇抄」 32

子規と異文化 孫順玉 「子規会誌」 121

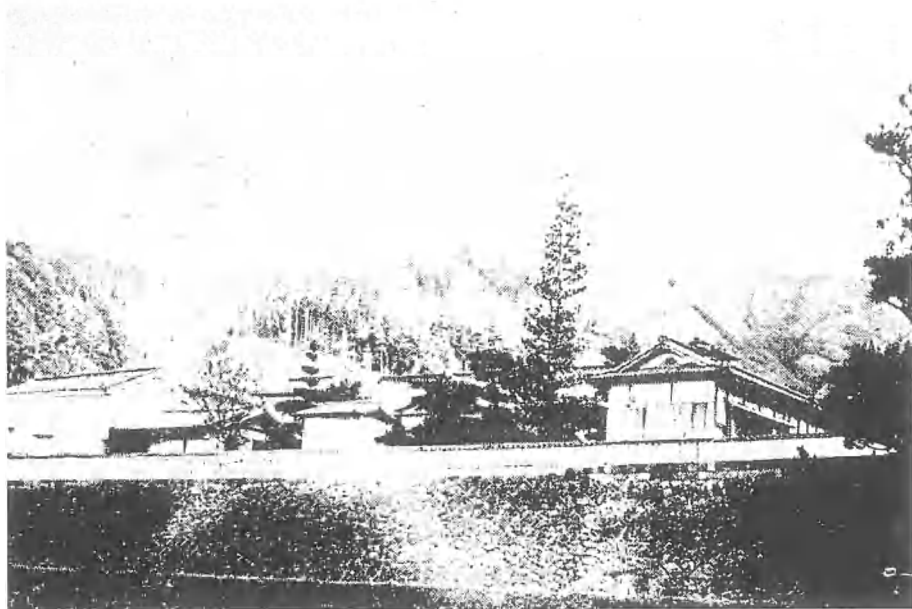
「散策集」と「松山名所三十二句」 和田克司 「子規会誌」 121

凄絶な子規句誕生事情 復本一郎 「鬼会報」 141

虚子による子規の病状報告―「脚湯」のこと― 復本一郎 「鬼会報」 142

『子規随筆』に対する虚子の不快感 復本一郎 「鬼会報」 143

連作の研究(27)、(28)、(29) 想の類型について(30)



③ 近藤林内翁宅

長男を峰之助と言ったが若死をしたので次子牧子に養子をして後、家を譲って隠居をした。その養子が近藤甚四郎である。不幸にも甚四郎病没したので明治十二年から再び家政を見る事とした。

林内、父母に孝順を尽し、其の父の喪にある間、百日間毎日菅笠を戴いて墓に詣り、死に事えること尚生に事えるが如くであった。林内日常質素儉約を旨とし、緻密なる家の規範を定めて出納を明かにし、一毛の微と雖もゆるがせにせず会計を嚴重にした。この故に仁慈公益のため莫大なる義捐をしたけれども家道益々繁昌して、一代の間に父祖の財産を数倍にしたということである。

林内、平生徳を積む事を無上の楽しみとした。その著しい例を挙げると、絶家を再興してこれに産を与え親族を救って田園金穀を給し、或は村内の年寄を招き養老の饗を行って今の敬老会を催した。又貧困で負債のため困って居る者はこれを助け、村内の鰥寡孤独で身寄のない者には毎年助け米を与え郡村内の貧民を救恤すること十三回に及んだ。此の村の農家は一般に毎年八九月のころ草を刈って唯一の肥料としたのであるが、中には貧困でその日の衣食に追われて草刈に行く事ができない者があった。翁は米二百俵を出し「肥刈飯料の備」と称してその利息で肥刈の飯料を与えて草刈を行わせた。

其他学校・道路・橋梁・堤防等に多額の義捐金を出し或

夏目漱石と二人の愛弟子 湯浅廉孫と内田百閒 横山俊  
之「虞美人草」 4

○高浜虚子

●単行本

子規から虚子へ―近代俳句の夜明け 虚子記念文学館  
平成二十一年、三、七

「正月」のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み  
西村睦子 本阿弥書店 平成二十一年、十二、十七

●論文

虚子百句 21、22、23 小西昭夫 「子規新報」 141、142、  
143

現代俳句史 28、29 戦中の高浜虚子 俳壇権力者とし  
ての虚子と国家権力に屈従した虚子 I、II 川名大 「俳  
句四季」 平成二十一年、四、五

高浜虚子の挨拶句 虚子の挨拶句と花鳥諷詠 山内繭彦

「俳句」 平成二十一年、四

虚子稿「病床の子規居士」小考 復本一郎 「鬼会報」

145

特集高浜虚子・没後50年「解釈と鑑賞」平成

二十一年、十一

高浜虚子『柿二つ』―虚子が描いた晩年の子規― 池内

惠吾 「文化愛媛」 63

最後の一句 晩年の句より読みとく作家論「高浜虚子」  
宗田安正 「俳壇」 平成二十一年、八

○河東碧梧桐

●単行本

河東碧梧桐全集第16巻 短詩人連盟 平成二十、十、

三十一

●論文

河東碧梧桐の書翰について 3. 長谷部清 「俳星」

平成二十一年、二

河東碧梧桐川西和露宛書簡翻刻及び解説 1. わたな

べじゅんこ 「ろくぶんぎ」 1

○その他

●単行本

評伝 平福百穂 加藤昭作 短歌新聞社 平成

十四、十、三十

明治の漢詩人 中野道遥とその周辺 二宮俊博 知泉書

館 平成二十一年、五、三十

ひとびとの聲音 司馬遼太郎 中央公論新社 平成

# 平成二十一年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

## ○正岡子規

### ●単行本

余は、交際を好む者なり 復本一郎 岩波書店 平成

二十一、三、二十五

司馬遼太郎「坂の上の雲」を読む 谷沢永一 幻冬舎

平成二十一年、四、十

連作と現代短歌 若宮貞次 短歌新聞社 平成十七、二、

一 仰臥漫録 角川学芸出版 平成二十一、九、二十五

子規の言葉 青波太郎 GUIDEKAZ OFFICE 平成

二十一、十

子規交流 喜田重行 創風社出版 平成二十一、十一、

十五

「坂の上の雲」の松山を歩く 愛媛新聞社 平成二十一、

十一、四

「坂の上の雲」と司馬史観 中村政則 岩波書店 平成

二十一、十一、十三

正岡子規の〈楽しむ力〉 坪内稔典 日本放送出版 平成

二十一、十一、十

「坂の上の雲」への招待 秋山好古・真之兄弟と正岡子規

らが生きた時代 新人物往来社 平成二十一、十一、十三

東京の子規 井上明久 創風社出版 平成二十一、十一、

十五

### ●論文

子規の眼 喜田重行 「愛媛アララギ」 平成二十一、一、

子規、最後の八年 23～33 関川夏央 「短歌研究」 平

成二十一、一～十一

子規の内なる江戸 1～12 井上泰至 「俳句」 平成

二十一、一～十二

子規の俳論俳話 10、12～21 中川みえ 「春星」 平成

二十一、一、三～十二

子規の生涯と俳句革新 21～30 佐々木建成 「天穹」

平成二十一、一～十

松山を代表する

# 銘菓「子規」・醤油餅

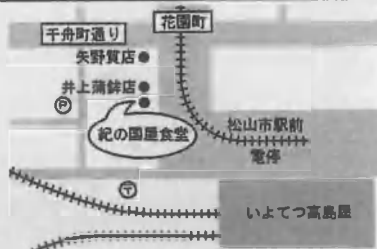
松山市道後湯之町13-7

## 巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

お食事処・麵処・宴会 (20名様)

## 紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、  
ふぐ会席、猪鍋  
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5

電話 945-1309  
(日曜 定休日)

旬味あふれる会席をたのしみ  
あふれる湯にお遊びください。

### 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707

予約専用 ☎089-941-7782 (8:45~20:00) ☎0120-10-4848 (8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

心を  
ゆるめて  
ゆつたりと

若宮貞次 「あかね」 平成二十一年、五・七・九・十一

俳句五百年7. 鶏頭の句は駄作 坪内稔典 「船団」 81

子規の風・子規からの風 5、6 「子規新報」 143、144

子規と啄木の生と死 池田功 「国文学解釈と鑑賞」 平成二十一年、八

成二十一年、八

藤野古白と正岡子規 和田克司 「近世文学研究」 創刊号

号

子規の新資料「なじみ集」について 中川みえ 「春星」

平成二十一年、八

子規生前の他流派による子規評—安藤和風の記録する子

規評—復本一郎 「鬼会報」 146

蛙の知己 坪内稔典 「船団」 82

子規の詩景 1、4 井上泰至 「若葉」 平成二十一年、

九、十二

正岡子規と『天降言(あもりごと)』 福田安典 「子規会

誌」 123

卓話 子規新資料について 和田克司 「子規会誌」 123

うたの花芒—わが秀歌鑑賞5(子規の短歌) 高野公彦

「短歌」 平成二十一年、五

子規俳句の需要の背景 1、2 塩谷郁夫 「杜鵑花」

平成二十一年、十一・十二

露伴と子規の『八犬伝』受容 徳田武 「文学」 平成

二十一年、十一・十二

新資料・明治二十九年八月十五日付正岡子規書簡 復本

一郎 「文学」 平成二十一年、十一・十二

正岡子規を支えた「友」 村上護 「俳句」 平成二十一年、

十二

### ○夏目漱石

#### ●単行本

漱石の病と『夢十夜』 三好典彦 創風社出版 平成

二十一年、八、三十

#### ●論文

漱石と禅 大野淳一 「国文学解釈と鑑賞」 平成二十一年、

二

挨拶句と前書 絶妙のコンビネーション 岩岡中正

「俳句」 平成二十一年、四

東洋城と漱石、そして壺天子 山本典男 「松山坊っちゃん

ん会会報」 8

『坊っちゃん』原稿を読む 8、9 佐藤栄作 「松山坊っ

ちゃん会会報」 8、9

虚子『漱石氏と私』の持つ意義—漱石・虚子の宮島行き

記述から— 頼本富夫 「松山坊っちゃん会報」 8

小説『坊っちゃん』の「高知のびかびか踊り」 塩崎俊彦

「松山坊っちゃん会報」 9



二十一、八、十

●論文

現代俳人列伝 111～121 「鷹」 平成二十一、一～十二

不折の場合―子規の「写生」に関連して― 1～3 清

水房雄 「愛媛青南」 平成二十一、二、三、五

幕末俳壇と明治俳壇の「断絶」と「連続」―其角堂永機を例

にして 越後敏子 「国文学解釈と鑑賞」 平成二十一、三

露月没八十年の新たな発見 工藤和洋 「俳星」 平成

二十一、四

松根東洋城論のためのノート 復本一郎 「鬼」 23

続驚きのえひめ古典史24 子規や漱石の愛した絵師―吉

田蔵沢― 福田安典 「子規新報」 142

子規のいとこと三鼠 平松牛夫 「子規会誌」 122

安藤和風のこと―子規と同時代の俳人― 復本一郎

「鬼会報」 147

内藤鳴雪と雅号 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十一、九

露月の京・なにわ・神戸―続「文人国手」 露月石井祐治

松本皎 「俳星」 平成二十一、九

村上露月つれづれ 中野匡子 「花鳥諷詠」 平成二十一、

九

秋山兄弟それぞれの夫人と家庭(歴史紀行31) 片上雅仁

「文化愛媛」 63

【訂正】

第一二六号(平成二二年七月号)掲載の「小山家の人々」

大原家・子規との関わり」の記述の中で、次の三項につ

き誤記があります。お詫びして訂正します。(渡部平人)

8 p下段7行 三十八年没 ↓四十年没

8 p下段20行 第二代当主恒重↓第二代当主の父恒重

9 p上段9行 第三代を継承 ↓第二代を継承

子規会誌 第二一九号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成二三年四月一九日

発行所 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇一六二〇一七一八六八

電話 〇八九九三五一〇三三八

# 子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット  
定価 58,800円



【編集委員】

粟津剛雄／大岡信／長谷川權／和田克司

四六判 上製・カバー装(各巻368頁～768頁) 定価 3,675円～3,990円 装幀 菊地信義

## 本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記・漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられ るよう工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の 充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

## 〔全15巻内容〕

- |      |         |
|------|---------|
| 第1巻  | 子規の三大随筆 |
| 第2巻  | 子規の青春   |
| 第3巻  | 子規と日本語  |
| 第4巻  | 子規の俳句   |
| 第5巻  | 子規の短歌   |
| 第6巻  | 子規の俳句革新 |
| 第7巻  | 子規の短歌革新 |
| 第8巻  | 子規と絵画   |
| 第9巻  | 子規と漱石   |
| 第10巻 | 子規の手紙   |
| 第11巻 | 子規の俳句分類 |
| 第12巻 | 子規の思い出  |
| 第13巻 | 子規の現在   |
| 第14巻 | 子規の一生   |
| 第15巻 | 子規と静岡   |

【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17  
TEL 055-973-7117

 Z-KAI  
<http://www.zkai.co.jp/>

## (有) 二葉印刷所

渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL (089) 925-0338  
FAX (089) 925-2189

¥400